

イザヤ書50-51章「叫び求める民、尋ね求める神」

1A 自分の罪への向き合い 50

1B 自分の罪による引き離し 1-3

2B 反抗に耐え忍ばれる方 4-9

1C 弟子の耳 4-6

2C 義とされる方 7-9

3B 聞き従わない者 10-11

2A 主の慈しみへの立ち上がり 51

1B 義を追い求める者 1-8

1C アブラハムの祝福 1-3

2C 諸国への救い 4-5

3C とこしえの義 6-8

2B 主の御腕への呼びかけ 9-16

1C 出エジプト 9-11

2C 人への恐れ 12-16

3B エルサレムへの呼びかけ 17-23

1C 憤りの杯 17-20

2C 悩ます者への憤り 21-23

本文

イザヤ 50 章を開いてください。主が、イスラエルに対して良いご計画を持っておられるのにも関わらず、気落ちしていて、その約束に応答できていないシオン、エルサレムの姿を読みました。そして 50 章に入りますが、50 章も 51 章も、イスラエルの民の主に対する呼び求めと、主ご自身が彼らに尋ねておられるところに、すれ違いがあるところを読んでいきます。イスラエルは、表面的なところで、主がこうしてくださらないとか、自分は見捨てられているとか言っているのですが、主ご自身は、「あなたがたが、わたしに対して応答していませんね。」と問いかけられるのです。それはあたかも、「あなたは、お医者さんなのに、どうして私の病気を直さないのですが。」と言っているところで、お医者さんは、「ゆっくりと休んで、栄養のあるものを食べなさいと言いましたが、実行していましたか？」と尋ねています。

でも、これは良いことです。私たちが、主に祈る時に、実は的外れな祈りであることを、祈るからこそ示されます。その時に、主から返ってきた意外な言葉に対して、当惑しますが、けれども自分自身を正すことができるからです。

1A 自分の罪への向き合い 50

1B 自分の罪による引き離し 1-3

¹ 主はこう言われる。「わたしがあなたがたの母を追い出したという 離縁状はどこにあるのか。わたしがあなたがたを売ったという、わたしの債権者とはだれなのか。見よ。あなたがたは自分たちの咎のために売られ、自分たちの背きのために、母は追い出されたのだ。

イスラエルの人々は、「主が私たちを見捨てられた」と言って嘆いていました。そして、バビロンに自分たちを売ったのだ、と言って嘆きました。しかし、主ご自身のほうで彼らを見捨てたことはないのです。むしろ、彼ら自身が主に背いて、自分たちが主から離れたので、それでバビロンに引き渡されるという結果を被りました。自分たちが神から離反していったのに、離れて行ったことによって被ったことを、神がそうしたのだと責めてしまっています。

こうしたことは、しばしば私たちには起こります。起こった災いについて、試練について、私たちは、神はなぜこうしたのか？と疑問を投げかけ、責めます。けれども、そもそも自分たちが神に何ら見向きもしなかった。したとしても、それは極めて表面的で、ちょっと祈ったけれども、願いがきかれなかったとかいうことで、神を責めるのです。私も、小学生の時、てるてる坊主を作って祈ったら、雨になりました。それで神なんかいるもんか！と思いましたが、大学生になって、今まで神を無視してきたことを認める祈りを献げた時に、主がすぐそばにおられ、そのままの自分を受け入れている、神の愛を知りました。

² なぜ、わたしが来たときだれもいなかったのか。わたしが呼んだのに、だれも答えなかったのか。わたしの手が短くて贖うことができないのか。わたしには救い出す力がないというのか。見よ。わたしは叱って海を干上がらせ、多くの川を荒野とする。その魚は水がなくて臭くなり、渴きのために死に絶える。³ わたしは天を闇でおおい、粗布をその覆いとする。」

彼らの次の嘆きは、主が、その手が短すぎてバビロンから贖うことができなかった。救い出す力がなかったというつぶやきです。主は無力だったのか？というものです。せつかく祈ったのに、なぜその祈りに答えられないのか？これは、しばしば私たちに思い浮かぶ疑問ですね。けれども、主は、「そもそも、あなたは、わたしが来た時に、呼び求めたのか？」と問われています。主が語りかけたのに、なぜ答えなかったのか？と問われています。

こんな話がありますね。洪水になって、自分は家の天井に上がって、助けを待っていました。主が、助けてくださいと祈りました。水難救助隊がやってきました。けれども、主が助けくださるのだからといって断りました。自衛隊がやってきました。それも断りました。そのうちに、水かさが増していった、ついに溺れ死にました。天国にいった、すかさず神のところで文句を言いました。どうして、助けなかったのか？と。神は、「わたしが、あなたに水難救助隊を遣わした。自衛隊を遣わした。

断ったのは、あなたのほうではないか。」ということです。

そして神は無力ではありません。無力に見えるのは、みこころがどこにあるかを見失っていたからです。神はご自分の力を、バビロンによって示しておられました。ネブカドネツアル王を「わたしのしもべ」とまで呼ばれました。ユダヤ人を捕え移したバビロンの王も主のしもべだったのです。そこに神は力を現わしておられたのです。無力どころか、力強い御手をもってイスラエルを懲らしめておられました。自分たちはバビロンからの救いが、神の力の現れであると思っていました。いいえ、バビロンがエルサレムを攻め取るところに、御力が現れていたのです。

そこで、主は、出エジプトのことを思い起こさせています。災いにおいて、御力を表しておられました。紅海を干上がらせました。ナイル川を血にして、魚が死にました。そして、闇が三日間覆うようにされました。その力を、バビロンによるエルサレム破壊の中でお見せになったのです。

2B 反抗に耐え忍ばれる方 4-9

1C 弟子の耳 4-6

⁴ 神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに私を呼び覚まし、私の耳を呼び覚まして、私が弟子として聞くようにされる。

私たちは前回、主のしもべとしてのメシアの預言を見ました。「49:2 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私をかくまい、私を研ぎ澄まされた矢とし、主の矢筒の中に私を隠された。」主のしもべは、神のことばを、矢筒の中に隠したもののようになされた、ということです。すでにイザヤは、メシアを、「42:3 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。」と預言していました。へりくだって、柔和な方として来られます。そして、みことばは、人を滅ぼすためではなく、建て上げるために用いられます。ですから、全能の力をもって人を剣のように刺して滅ぼすことはできませんが、そうではなく、抑えて、人々に神の栄光が見えるように整えて、それで語っておられました。

それは、無駄な骨折りのように見えます。だからそのことも、主のしもべは訴えた。それを主ご自身、つまり父なる神は訴えを聞かれました。そして、主は、しもべをイスラエルを立たせるためだけでなく、諸国の光ともされます。

そしてここ 50 章 4 節以降は、その続きの預言と言ってよいです。この方は、弟子のようになられました。弟子のすることは何か？朝ごとに、主が弟子に語りかけます。それを、しっかりと聞きます。それが、耳を呼び覚ますという言葉です。ですから、私たち、キリストについていく、弟子として召されている者たちは、朝ごとに主からの語りかけに、耳が呼び覚まされ、聞くようにされています。

そして、その主のことばによって、「弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え」ることができます。疲れているというので、イエスの語られた有名な言葉が、「マタ 11:28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」がありました。これは、主ご自身がカペナウムなどで、宣教の働きをされたのに、多くの人が反応しなかったために、主が、呪いを宣言された後で語られたことです。働きが無駄になっているのかと感じてしまう、その疲れに対して、主が、「わたしのところに来なさい」と言われました。その励まし力は、主ご自身が父なる神とともにおられ、父から聞いていたからに他なりません。

⁵ 神である主は私の耳を開いてくださった。私は逆らわず、うしろに退きもせず、

驚くべき、メシア預言です。イエスが、この仕打ちを受けられましたが、まさにこの預言の成就でありました。まず、「神である主は私の耳を開いてくださった」とあります。これこそが、イエスが父なる神の言われることに、徹底して従われた姿勢を示しています。というのは、出エジプト記に、主人と奴隷の律法がありました。同じヘブル人の奴隷を買う場合は、七年目には必ず自由の身にしなければなりません(21:1-6)。しかし、奴隷は、自分の意志で「私は、自由の身になりたくありません。いつまでも主人に仕えます。」とすることができます。その時に儀式として、こうあります。「21:6 その主人は彼を神のもとに連れて行く。それから戸または門柱のところに連れて行き、きりで彼の耳を刺し通す。彼はいつまでも主人に仕えることができる。」とあります。

主イエスは自ら、ご自身の意志で父なる神に仕えることを選び取られたということです。そして神の命じられることは何でもするという、神への愛に基づいてどんなことがあっても従われることを決められたのです。「私は逆らわず、うしろに退きもせず」とあります。これは不退転の決意であります。もう後に戻らないと決めているのです。自分が、主からの言葉をそのまま実行する、もう後ろを振り返らないと決めてしまう決意です。

⁶ 打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった。

これらのことは、すべてイエスの身に起こりました。ユダヤ人裁判において頬を打たれました。侮辱されました。つばきをかけられました。ひげを抜かれたことについては具体的に書かれていませんが、これも行なわれたのでしょう。髭を抜くことは、ただ痛いだけのことではありません。髭は男の尊厳を表していましたから、非常に侮辱的なことです。そして唾も同じです。唾をかけることは、相手を非常に侮辱している行為です。「マタイ 26:67-68 それから彼らはイエスの顔に唾をかけ、拳で殴った。また、ある者たちはイエスを平手で打って、「当ててみる、キリスト。おまえを打ったのはだれだ」と言った。」そして総督ピラトによって、鞭打ちを受けられました。

しかし、最後の言葉が大事です。「私の顔を隠さなかった」とあります。主イエスは、神のみこころが、ご自身が捨てられること、死に渡されることであることを知っておられたので、その仕打ちに服従されたのです。

2C 義とされる方 7-9

⁷しかし、神である主は私を助けてくださる。それゆえ、私は侮辱されることがない。それゆえ、私は顔を火打石のようにして 自分が恥を見ないことを知っている。

ここは、イザヤの預言でしか見ることのできない、福音書では書き記されていない、イエスご自身の心です。主は、ゲッセマネの園を始めとして、父なる神に祈られました。そこで、神である主がご自身を助けてくださることを知っておられました。たとえ、人から侮辱されても、神がご自身を、その尊厳を守ってくださるので、侮辱されることはないのだということです。したがって、ご自身がその姿はたとえ惨めで、恥さらしであっても、それでもその毅然とした態度を貫くことができたのです。それを、ここでは「私は顔を火打石のようにして」と言われています。反対者に対して、何ら動じることのない姿です。

ペテロの第一の手紙は、このキリストに私たちが倣っていると教えています。「2:20-21 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。」

⁸私を義とする方が近くにいてくださる。だれが私と争うのか。さあ、ともに立とう。だれが私をさばく者となるのか。私のところに出て来るがよい。⁹見よ。神である主が私を助けてくださる。だれが私を不義に定めるのか。見よ。彼らはみな衣のように古び、シミが彼らを食い尽くす。

主は、ご自身を義としてくださる方が近くにおられることを知っていました。その義は、ご自身の復活で明らかにされます。十字架で罪に定められましたが、復活によって、無罪が晴れたのです。このように、義と明らかにされた復活に信頼を私たちが置くので、私たちも恵みによって義とみなされるのです。「4:24-25 私たちのためでもあります。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです。主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。」

そして、この方を不義と定めるようにする者こそが、善を悪とし、悪を善とする罪で、確かに裁かれます。それで、「彼らはみな衣のように古び、シミが彼らを食い尽くす。」と宣言しています。イエスは、ゲヘナのことを語られました。「マル 9:48 ゲヘナでは、彼らを食らううじ虫が尽きるこ

く、火も消えることはありません。」

3B 聞き従わない者 10-11

¹⁰ あなたがたのうちで主を恐れ、主のしもべの声に聞き従うのはだれか。闇の中を歩くのに光を持たない人は、主の御名に信頼し、自分の神に拠り頼め。

主が、イザヤによって啓示されている、主のしもべについての預言に対して、今、その声に従いなさいと呼びかけ、招いています。まだ光を持っていない者は、主の御名に信頼して、この方を自分の神としなさい、ということです。

¹¹ 見よ。あなたがたはみな、火をともし、燃えさしを身に帯びている。あなたがたは自分たちの火の明かりを持ち、火をつけた燃えさしを持って歩くがよい。このことは、わたしの手によって あなたがたに起こり、あなたがたは苦悶の場所で伏し倒れる。

これは、自分がまだ闇の中にいると悟っていない人に対する警告です。主のしもべが光であられるのに、「いや、自分は分かっている。自分のうちに光があるから。」とする者の心の態度です。そうすれば、その頑なさや高ぶりによって、自分自身が燃えてしまう、つまり、裁かれてしまうということでもあります。高ぶりは、破滅に先立つと聖書で預言されています。

2A 主の慈しみへの立ち上がり 51

このように、イスラエルの中にも、主の慰めと希望に対して応答せずに、頑ななままに滅んでしまう人々が出てきますが、しかし、義を追い求める者たちもいます。イザヤの預言などには、「残された者」であるとか、「残りの民」とか呼ばれます。パウロも、ユダヤ人でイエスを信じた者たちを、そのように表現しました。「ロマ 11:5 ですから、同じように今この時にも、恵みの選びによって残された者たちがいます。」

1B 義を追い求める者 1-8

1C アブラハムの祝福 1-3

¹ 義を追い求める者、主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。あなたがたが切り出された岩、掘り出された穴に目を留めよ。² あなたがたの父アブラハムと、あなたがたを産んだサラのことを考えてみよ。わたしが彼一人を呼び出し、彼を祝福し、彼を増やしたのだ。

義を追い求めている人、主を尋ね求めている人々、すなわちイスラエルの中の残された者たちに対して、主が、わたしに聞きなさいと言われていています。それは、何か外に目を向ける必要はない、自分自身のルーツに戻れば、信じがたいことであっても希望を抱ける、ということです。それが、父

祖アブラハムです。「あなたがたが切り出された岩、掘り出された穴に目を留めよ」と言われていますね。アブラハムから、イスラエルの子孫が増え広がっています。そして、数ある諸国民から、アブラハムが掘り出されて、それで新しい、神ご自身の民に育てられたのです。

彼とサラのたった一人の子イサクによって、イスラエルは増え広がりました。そして祝福されました。これが、まさにこれからの希望でもあります。どんなに人数が少なくとも、バビロンで捕囚の民の身分であっても、主はやり直しができるということです。

³ まことに、主はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰めて、その荒野をエデンのようにし、その砂漠を主の園のようにする。そこには楽しみと喜びがあり、感謝と歌声がある。

エルサレムは廃墟となり、涙と嘆きしかないところで、この言葉は絵空事に聞こえます。エレミヤが哀歌で、哀しみの歌をうたったようにです。けれども、主は廃墟を慰められます。それを建て直されるだけではありません。荒野をエデンの園、砂漠を主の園のようにします。ちなみに、荒野と砂漠は若干、違います。そして楽しみと喜び、感謝と歌声があるのです。こんなこと、とんでもないと思うかもしれませんが、アブラハムに神が約束されたことは、絵空事だったのだよ。でも、実現したよね？と問いかけておられるのです。

2C 諸国への救い 4-5

⁴ わたしの民よ、わたしに心を留めよ。わたしの国民よ、わたしに耳を傾けよ。おしえはわたしのもとから出て、わたしが、わたしのさばきを 諸国の民の光と定めるからだ。⁵ わたしの義は近く、わたしの救いは現れた。わたしの腕は諸国の民をさばく。島々はわたしを待ち望み、わたしの腕に期待をかける。

そして、アブラハムに与えられた神の約束は、いかにすぐれているかを、イスラエルの国民自身が知ってほしいと願われています。それは、彼らが世界の祝福となるということです。それは、彼らから出た子孫、メシアが諸国の民の光となるのです。神は、イスラエルから出たメシアによって、島々の人々も、つまり地の果てにいる人々も、イスラエルの神を待ち望み、その腕に期待をかけるようになります。つまり、私たち自身、イスラエルのメシア、イエスに心を寄せ、待ち望んでおり、その大きな、夢のような話はそのまま実現しています。

3C とこしえの義 6-8

⁶ 目を天に上げよ。また、下の地を見よ。まことに、天は煙のように消え失せ、地も衣のように古びて、その上に住む者はブヨのように死ぬ。しかし、わたしの救いはとこしえに続き、わたしの義は絶えることがない。⁷ 義を知る者たちよ、わたしに聞け。心にわたしのおしえを持つ民よ、人のそしりを恐れるな。彼らの、ののしりにくじけるな。⁸ まことに、シミが彼らを衣のように食い尽くし、虫が彼ら

を羊毛のように食い尽くす。しかし、わたしの義はとこしえに続き、わたしの救いは代々にわたる。」

義を求める人、主の教えを持っている人は必ず、人からそしりを受けます。罵りを受けます。イエスがそうであったように、必ずそうなります。そこで、大事な勧めは「恐れるな」ということです。今、天と地に目を向けなさいと言われていました。そして、これら天地は過ぎ去るのだと言われていました。しかし、過ぎ去らないものがあります。それが、神の義と救いです。神が、恵みによって、ご自分の義によって、イスラエルを救い、そして私たち異邦人も救います。その義は、天地万物を造られ、天地を過ぎ去らせる方は、いつまでも残るようにされています。

だから、人々のそしりを恐れるなと命じておられるのです。そしる者は、シミのついた衣のように滅び、虫のついた羊毛のように食い尽くされます。誰を恐れなければいけないのか？それは、神ご自身ですよということです。イスラエルは、神に選ばれた民のゆえ、敵意にさらされます。たった今、それが顕著に表れています。そして、キリスト者も同じです。主は、義のゆえに迫害されると言われましたが、果たしてその通りになっています。しかし、滅びるのはそうした中傷のほうです。

2B 主の御腕への呼びかけ 9-16

1C 出エジプト 9-11

⁹ 目覚めよ、目覚めよ。力をまとえ、主の御腕よ。目覚めよ。昔の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。

ここから、「目覚めよ、目覚めよ。」という、イスラエルの民と、神ご自身とのやり取りが始まります。主が、ご自身の救いと義はとこしえに続くとお励ましてくださいました。それで勇気を得て、彼らが、「力をまとえ、主の御腕よ」と呼びかけています。これは、主がかつて、イスラエルの民をエジプトから連れ出した力強い腕のことです。「出 6:6 それゆえ、イスラエルの子らに言え。『わたしは【主】である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役から導き出す。あなたがたを重い労働から救い出し、伸ばされた腕と大いなるさばきによって贖う。』」かつてその通りにしたように、今も、主よ、目覚めて、力を身にまわってくださいと願い求めています。

「ラハブ」とか、竜とかいう言葉が出て来ていますが、ラハブはエジプトの別名です。当時、あらゆる力と富を持ち、あらゆるものを神々として、自分自身を神としていたファラオの背後には、竜、すなわちサタンの力が働いていました。エジプトは、イスラエルの民にとってこの世であり、その王ファラオはサタンのものでありました。この世を裁き、サタンの脳天を打ち砕くのは主ご自身であり、主はそこから私たちを解放してくださいます。

¹⁰ 海を、大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、贖われた人々が通るようにしたの

は、あなたではないか。

これはもちろん、別れた紅海の中を、民が通るようにされた時のことを語っています。

¹¹ 主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭には、とこしえの喜びを戴く。楽しみと喜びがついて来て、悲しみと嘆きは逃げ去る。

エジプトから脱出せしめた主は、今度は、主の贖われた民を、シオンに帰らせ、喜びと楽しみをもたらしてくださる、涙と悲しみを逃げ去らせてくださると言っています。

2C 人への恐れ 12-16

¹²「わたし、わたしこそ、あなたがたを慰める者。あなたは何者なのか。死ななければならない人間や、草にも等しい人の子を恐れるとは。¹³ 天を延べ広げ、地の基を定め、あなたを造った主を、あなたは忘れ、一日中、絶えず、虐げる者の憤りにおののいている。まるで滅びに定められているかのように。その虐げる者の憤りはどこにあるのか。

主は、確かにわたしがあなたがたを慰める者だと、彼らの叫びに応えてくださっています。しかし、彼らは、力強く動いてくださいと訴えているのですが、心の中は、まだ主ご自身に明け渡していないのです。バビロンの中において、まだ虐げる者の憤りにおののいているのです。そこで、主は、ご自身が天地を造られた者であることを語り、その真理に基づいて願いなさいと言われていました。

私たちは、祈り求めたり、献げ物をしたりする時に、実はまだ心が主と一つになっていないことがあります。形としては、主の力強い働きを求めているのですが、実は自分自身がその神の力強さに信頼せずに祈っています。信頼しきってない中で願い求めていることが多々あるのです。ヤコブもこの点を手紙の中で指摘しています。「ヤコブ 1:6-8 ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。その人は、主から何かをいただけると思っはなりません。そういう人は二心を抱く者で、歩む道すべてにおいて心が定まっていないからです。」

¹⁴ うづくまる捕らわれ人もすぐに解き放たれ、死んで穴に下ることはなく、パンにも事欠かない。¹⁵ わたしはあなたの神、主。海をかき立て、波をとどろかせる。その名は万軍の主。¹⁶ わたしのことばをあなたの口に置き、この手の陰にあなたをかばい、天を置き、地の基を定め、『あなたはわたしの民だ』とシオンに言う。」

主は解き放たれます。そして、死から守ってくださいます。また事欠くことから守ってくださる。主は、ご自身の語られることばを、彼らに与えられます。私たちにも、みことばを与え、それを

私たちが語るようにされますね。そして、ご自身の手でかばってくださいます。それは、天地を造られた方です。そして、その神が、あなたがたはわたしの民だと保障してくださっているのです。

3B エルサレムへの呼びかけ 17-23

1C 憤りの杯 17-20

¹⁷ 目覚めよ、目覚めよ。エルサレムよ、立ち上がれ。あなたは主の手から憤りの杯を飲み、よろめかす大杯を飲み干した。

主は、今度は彼らに対して、残りの民に対して、「目覚めよ、目覚めよ。」と呼びかけておられません。彼らが目覚めないといけないのです。

「あなたは主の手から憤りの杯を飲み、よろめかす大杯を飲み干した」と言われています。これは、バビロンによるエルサレム破壊のこともありますが、それを越えて、終わりの日に、エルサレムが、主の憤りの杯を飲むということです。これは、滅ぼされるための杯ではなく、エルサレムが世界の軍隊に取り囲まれ、攻められ、大患難に遭うことが預言されているからです。イエスご自身が、預言されました。「マタ 24:21-22 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。もしその日数が少なくされないなら、一人も救われないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」

¹⁸ 彼女が産んだすべての子らのうち、だれも彼女を導く者はなく、彼女が育てたすべての子らのうち、だれも彼女の手を取る者はない。¹⁹ これら二つのことがあなたを見舞った。だれがあなたのために嘆くだろうか。暴行と破滅、飢饉と剣。どのようにして、あなたを慰めようか。²⁰ あなたの子たちは気を失い、すべての通りで倒れ伏す。網にかかった大かもしかのように。彼らには、主の憤りと、あなたの神のとがめが満ちている。

大患難の時は、シオンは敵に取り囲まれます。預言者たちが、このことを克明に預言しました。「ゼカ 14:1-2 見よ、【主】の日が来る。あなたから奪われた戦利品が、あなたのただ中で分配される。「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」」ダニエルの預言によると、これらは聖徒たちの力を打ち砕くため、残された者たちが主により頼むための試練だということです。「ダニ 12:7 それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。」

2C 悩ます者への憤り 21-23

しかし、主は彼らのために戦われます。今、引用したゼカリヤ 14 章には、続きの 3 節に「【主】が出て行かれる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。」とあるのです。そこで、次のイ

ザヤの預言になります。

²¹ それゆえ、さあ、これを聞け。苦しむ者よ。酔っていても酒のせいでない者よ。²² あなたの主、ご自分の民を弁護するあなたの神、主は こう言われる。「見よ。わたしはあなたの手から、よろめかす杯を取り上げた。あなたはわたしの憤りの大杯を もう二度と飲むことはない。²³ わたしはこれを、あなたを悩ます者たちの手に渡す。彼らは、かつてあなたに『ひれ伏せ。われわれは乗り越えて行こう』と言った。それで、あなたは背中を地面のように、また歩道のようにして、彼らが乗り越えて行くのに任せた。」

明確に、その憤りの杯を、相手に渡すと言っておられます。主は最後に、これら攻撃している者たちに、ご自分の怒りの極みまで注がれます。このようにして、エルサレムはこれまで、敵から囲まれて、敵に攻撃されて、そこで恐れが第一にやって来るようになってしまいましたが、主は何度となく、そこから目を覚ませ、立ち上がれと励ましておられるのです。

主は私たちキリスト者にも、同じように目を覚ませと呼びかけておられます。これほどまで敵に攻撃され来たエルサレムでさえ、永遠の愛と慰めで立ち上がらせてくださるのですから、私たちも、敵からの攻められていても、主はどこまで愛されているのかに目覚める必要があります。